

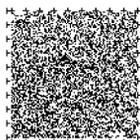
藤牧 義夫の作品について



ガイドスタッフT

素朴で可愛らしい雰囲気も漂う小さな版画たち。これらは 24 歳で消息を断った藤牧義夫がわずか 5 年余りの版画家としての本格的な活動期間中に発表した作品です。16 歳で上京し働きながら独学で身につけた技法で、関東大震災からたくましく復興してゆく東京のさまざまな風景を、藤牧はどんな思いで彫り進めたのでしょうか。私には、ところどころに大きく配された余白がきらめいた光のようにも見えます。当時の藤牧にとっても、これらの近代的な都市風景は自身の明るい未来を照らす希望の光に見えていたのかもしれませんが。

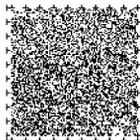
音声コード
Uni-Voice



朝倉 摂について

東京・谷中出身の朝倉摂。その生家は現在、朝倉彫塑館（台東区）として公開されています。日本画家を志し、偉大な彫刻家である父のもとから自立するため、27歳で独立。画家として活動していたのは主に1940～60年代の30年間ですが、現代社会への関心が高く、50年代には漁村・炭鉱・工場などへスケッチ旅行に出かけ、戦後日本を支えた労働者をたくさん描いています。ひとりの若い画家として、当時の日本の現実に向き合っていました。その後、舞台美術家に転身しますが、時代や物事の本質をとらえるため、写生は毎日続けていたそうです。

音声コード
Uni-Voice



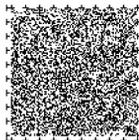
ガイドスタッフ M

光島貴之 《手ざわりの冒険》 2019

美術館で「作品に触っていいよ」と言われたことはありますか？ 打ってあるピンの美しさを感じる作品ですが、是非触ってみて下さい。目を閉じてもいいですね。

触れているところに気持ちを集中させると、それまで感じなかったことに気づきませんか。美術作品は「見る」以外の方法でも味わえるんですよ。ずっと触っていたい質感だったり、思った以上にデコボコが気になったり。次々に変わる肌触りを楽しみながら一緒に冒険をしましょう！

音声コード
Uni-Voice

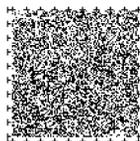


ガイドスタッフH

アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

「鉄」といえば硬く重い工業用の材料をイメージする方が多いでしょう。1959年アメリカで見た抽象彫刻に刺激を受け、カロは鉄に赤や黄などの鮮やかな彩色を施し、台座を取り払い、軽やかで自由な形を生み出しました。新しい鉄の彫刻の誕生です。海の変化を表すタイトルの通り、明るいブルーグリーン
の海、刻々と変化し、足元に打ち寄せる柔らかな波、穏やかな波の音が聞こえてきそうな感じがしませんか。お帰りの際には1階展示室入り口から外を眺めて下さい。カロの《発見の塔》が見えます。開館時からずっとここで私たちを楽しませてくれています。

音声コード
Uni-Voice



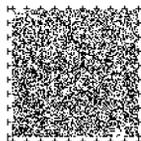
ガイドスタッフ T



安齊重男の作品群について

安齊重男という名前を知らずとも、現代美術家やその作品たちを写した作品を期せずして目にしている方は多いかもしれない。1970年以降、本人が言うところの「現代美術の伴走者」として生きる事となった。彼の膨大な数の写真は貴重な現代美術の資料でもある。が、何よりも魅力的な色や、捉えた場面を見てほしい。本人がワクワクした作家・作品をどこまでも追いかけて行き、その眼が切り取ったイメージ。それらは「記録」というだけでない、印画紙

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y

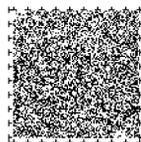


アンソニー・カロ 《小浜の格子縞》 1990-92

アンソニー・カロは鉄の彫刻家として知られていますが、こんな作品もあるんですね。この作品は、福井県小浜市を訪れたカロが、日本の和紙で制作してみたい！と取り組んだ若狭和紙を用いた作品です。重い重い鉄であっても、軽い和紙であっても、さまざまな形を切り抜き、綿密に組み合わせて作品は出来上がっていきます。

ハサミでちょきちょきできない鉄でさえ軽やかに扱うカロですが、この時は楽しげに、手ずから紙を切ったり貼ったりしている姿が目につかぶ、そんな作品です。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y

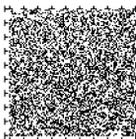


栗田 宏一

《POYA DAY —満月の日の小石拾い 108 夜》 1991-99

ポヤ・デーとは満月の日にお寺で祈る、スリランカの祝日です。作家は若い頃、月の引力を感じるために毎月満月の日に浜辺に立ち続けました。徐々に水位が上がり、やがて体がすっぽりと海水に覆われる…。満月の日は満潮と干潮の差が2m近くにもなるそうです。この作品ではそれが石を拾うという行為に代わっています。小石の数が煩惱と同じ、108 個になるように制作されましたが、実は今も小石拾いは続いているそうです。美術館を出たら、ぜひあなたも足元の石に目を落としてみてください。いままで見えなかった何かが見えてくるかもしれません。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ F



アルナルド・ポモドーロ

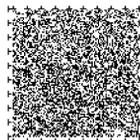
《太陽のジャイロスコープ》 1988



ガイドスタッフ1

ジャイロスコープは船や飛行機の針路を定める時に使われる道具です。絶対の安定性と信頼性が求められます。作品を見てみましょう。とても力強く、合理性を感じます。でも気付きましたか。そこにある鋭い裂け目に。作者のポモドーロによれば、この裂け目は深層意識を表現しているのだそうです。合理性と深層意識が共存しています。この作品を見ると私は自分の人生を思います。岐路に立ち人生の針路を定める時には合理的な判断を心がけ、人生を送ってきたように思うのですが、そうでなかったこともあるなど。それは、それでよかったなど。

音声コード
Uni-Voice



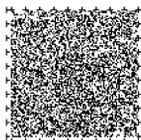
オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング》について

真っ白な余白のあるキャンバスに言葉がひとつずつ描かれています。鑑賞するには少し仰ぎ見る必要があります。切り取られたひとつひとつの言葉は、日常の会話で使われる時とは、異なるものにも思えてくるかもしれません。誰にでも開かれているようで、それは「私」だけのために向けられた言葉のようにも感じます。一つの言葉に惹かれましたか？横に並んでいる言葉と結び付けて、あなただけの詩を紡いでみましたか？

このような形式のアートはインストラクション（指示）と呼ばれますが、この作品はむしろ、私たちの心を自由に解き放ってくれるようです。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ N



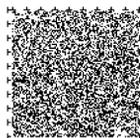
トミエ・オオタケ（大竹富江）《Untitled》 2008

ゆるやかに、のびやかに、自由に進む白い曲線。「見る人の感じ方を大切にしたい」と作品に題はつけなかったそうですが、あなたはどんなイメージをもちましたか？

オオタケは 1913 年京都で生まれ、ブラジルへ移住。独学で絵を描き始め、幾何学的な抽象絵画や彫刻を制作し、2015 年に 101 歳で亡くなるまでブラジルを代表する作家として活躍しました。

大正生まれのハイカラ女性が遥かブラジルで好きな道を極めて成功を修める、なんて素晴らしいのでしょうか！その精神が作品にも表れていると思いませんか。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ T



鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音（おとだて）」 and "nozo mi"》

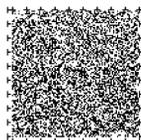
2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれません。が、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについてみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y

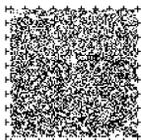


文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。

音声コード
Uni-Voice

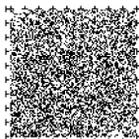


ガイドスタッフ O

アンディ・ウォーホル 《6枚組の自画像》 1966

1枚の写真を元に、シルクスクリーンという版画技法で刷られた自画像です。顔半分は影に隠れ、目の表情がはっきりわかりません。私たちに見られることを拒んでいるのか、あえて神秘的なキャラを演じているだけなのか。色違いの同じ画像が6枚組み合わせられているのはなぜ？まるで機械的にスタンプを押したよう。不気味さも感じて私には生身の人間に見えません。作家の思いが込められているという自画像のイメージから遠く、謎は深まるばかりです。作家は自分をどう見て／どう見せたかったのでしょうか？

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ N

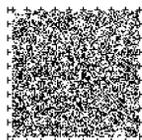


アレックス・カツ 《リンダ》 1989

この作品のような横長の紙を渡されて、「ここに顔を描いてください」と言われたらびっくりしませんか？そして、さあどうやって描こうかと悩むのではないかと思います。そんな横長画面に、「こう描くか！」という大胆な構図がとても印象的な作品です。

アレックス・カツは、家族や友人など、親しい人をモデルにして作品を描きます。プロのモデルさんだったら出せないような、心を許した人だからこそ、この自然で温かい表情。描いているカツとの関係が伝わってくるような、穏やかで明るい空気を感じます。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフK

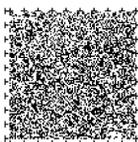


中園孔二 《無題》 2012

お姫様のような人と白い人のようなものが、薄気味悪いけれどちょっと可愛らしくも思える4体の大きなシルエットに囲まれていますね。その眼はお姫様と白い人を見つめているし、身体の部分にはさらに眼が浮かんでいます。

これはどんな場面でしょう？ 白い人はお姫様を守っているのか、それとも連れ去ろうとしているのかしら？ 絵の具が重ねられて層になったこの絵を見ていると、私たちも絵の一部としてこの緊張感のある現場を目撃しているように思えてきませんか。

音声コード
Uni-Voice

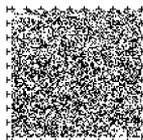


ガイドスタッフH

奈良美智について

ぬいぐるみのように可愛いらしい子どもですが、睨みつけるような目が印象的な絵。作者の奈良さんは青森県出身。愛知県の美大を出たあと、約12年間ドイツで生活し、制作を続けました。こうした子どもの絵はこの時期にうまれたもの。言葉がスムーズに伝わらない環境の中、自分の作品でコミュニケーションがとれないかと、一人家にこもり制作を続けたそうです。自分自身と作品に向き合う時間が長いほど、外に出たとき、作品をみた人と会話がはずむのではないかと奈良さんは語っています。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ M

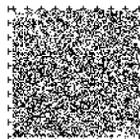
モニール・ファーマンファーマイアンの 作品について

作品の前に立ってみて下さい。室内の光を集めてキラキラと輝いています。床にも反射した光が。鏡を細かく割って組み上げたモザイクの技法で作られています。タイトルを見てみると《オクタゴン》8角形、《ヘプタゴン》7角形、《ノナゴン》9角形など幾何学を表す言葉が使われています。モザイク模様はひとつの多角形を中心にどこまでも模様を繋げていくことができます。ここにある作品はそれぞれ1つの多角形ですが、見た人の心の中でどんどん増えてキラキラしながらたくさんの人を繋いでいくと良いですね。



ガイドスタッフH

音声コード
Uni-Voice

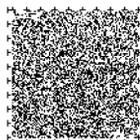


多田美波 《周波数 37306505》 1965

鏡のようにあなたの姿をとらえる半球が6つ。どれも凸凹としていて、そこに映る6人のあなたもタテヨコ様々なサイズ。そしてよく見ようと近づけば近づくほど、その歪みは強調されてしまう…。

今年生誕100年となる多田美波は、美大で絵画を専攻した後、絵具をはなれ、金属、アクリル樹脂やガラスといった、非伝統的な素材をつかった彫刻を生み出しました。この作品でも、アクリルの上にアルミニウムのメッキが施されています。幼い頃からものづくりが好きだったという多田は、こうした加工技術の開発にも意欲的に取り組みました。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフF

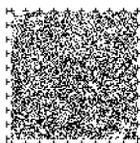


宮島 達男 《それは変化し続ける それはあらゆる
ものとの関係をつぶす それは永遠に続く》 1998

しばらく眺めてみましょう。1から9までの赤く
点滅する数字が、それぞれ違う速度で繰り返し動いて
います。0はありません。

ここから何をイメージしますか？ 生と死、人生、
人間社会、あるいは宇宙でしょうか。LED デジタル
カウンターを使ったシンプルな数字だからこそ、
感じ方はさまざま。想像が広がるのかもしれませんが。
この作品の長いタイトルは、作家が大切にしている考え方
そのものです。「それ」とは何でしょう。あなたなら
「それ」をどんな言葉に置き換えたいですか？ 広い
この空間に包まれながら、時間を忘れて考えて
みませんか。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ N

